

## 異国の空に揚げる

一九五六年一月（昭和三十一年）、ベネズエラで行なわれたカリブ海沿岸諸国の「オリンピック」のアトラクションに、私は花火打揚げを頼まれて出かけた。会場はカラカス市の大きなグラウンドで、聖火台の火が消えると同時に花火を打揚げてファイナレを盛り上げようという趣向であった。

用意していった花火は八寸（八号）以下二百発とスタイン二百発、それに仕掛花火のナイヤガラ瀑布百メートルで、日本の花火大会でいえば中規模クラス。スタインとナイヤガラの設置は現地の国防軍の砲兵たちが手伝ってくれたが、打揚げ者は私一人、おまけに打揚げ時間は三十分間で、それより早すぎても遅すぎてもいけないということであったので、てんやわんやであった。

七、八寸玉は単発で、四、六寸は早打ちであった。七寸玉と八寸玉各十発をそれぞれ二本の筒で打揚げ、六寸以下の打揚げは一回に十発を一本筒で打揚げ、同じ筒は二回使用しないことにしていたので筒の数は多かった。一回分の早打ちの玉は筒の近くにおき、私が手を上げると焼金を兵隊さんが運んできて筒の中に入れてくれるので玉の運搬は必要なく助かった。ナイヤガラ瀑布のほうは点火する時間をきめて兵隊さんに頼み、他の打揚げ玉の容器には時間を大きく書いておき、時間専門の係にお願いした日本大使館の人にみてもらったので一分の差もなく無事終了したのであった。

それから八年後、今度はフランスのパリに花火を打揚げにいった。日仏文化交流の一環として読売新聞が企画したもので、今回は青梅市の志村さんという電気屋さんといっしょで、彼が点火を受けもってくれたのでたいへん助かった。花火の規模としてはベネズエラるときより大きかった。打揚げ現場はルイ王朝華やかなりし頃にできたという「ソウ」公園で、広大な敷地内にある豪華な庭園の中央の瀑布と池の付近であった。打揚げには現地

の花火業者三人が手伝ってくれたので非常に助かった。その現地の花火師たちと、花火の実施される前後一週間ほど、いっしょにドライブしたりしていろいろと話をきいたのだが、花火の技術や知識は日本の明治の末期程度ではないかと感じた。彼らは「もう再びフランスに花火をもってきてくれるな」というので、私は「私だけは約束できるが、皆さんがもう少し勉強しないと私以外の日本人が商売にくるかもしれない」と答えた。そのうちの一人が、自分の一人息子を仕込んでもらいたいと熱心にいつていたのはいまだに忘れられない。私どもが打揚げた翌日彼らのパリー祭の花火を見たが、比較にならないほど貧弱なものであった。